

『とりかへばや物語』左大臣家の繁栄

— 作品成立背景をめぐって —

東 滋 実

はじめに

『とりかへばや物語』は、異母きょうだいではあるが瓜二つの男女のきょうだいだが、女君は性格が男性的であるために男装を、男君は性格が女性的であるために女装をし、それぞれが性を入れ替える物語で、男装の女君を中心に展開する。

この男女の性を入れ替えるは、それまでの作り物語にはない特異な人物設定であるがゆえに、その特異さや同性愛的描写の類靡性ばかりが注目されがちである。しかしその一方で、男装して大将にまでなった女君も、尚侍として女春宮に仕えていた男君も、物語後半ではそれぞれが異装を解いて元の性に戻る。女君は今尚侍として出仕しはじめ、帝の寵愛を得て中宮となり、男君は最終的に関白左大臣となる。最後まで異装を通すことはなく、元

の性に戻り、左大臣家の二人のきょう代いは栄華を極めて大団円で締めくくられる物語である。

この『とりかへばや物語』の描き方は、それまでの物語作品には見られなかった特徴があるように思う。平安前期物語の『竹取物語』や『落窪物語』などは特に宮廷が舞台になることがなかったし、その後の『うつほ物語』や『源氏物語』などでは宮廷が舞台になることはあっても、基本的には男性主人公を中心に物語が展開している。女性の登場人物が后になるようなことがあっても、作品の本筋にはあまり関わっていない。女主人公の生涯を描くという点では、『夜の寝覚』は『とりかへばや物語』と同じであるが、一部宮廷が舞台になることはあっても基本的には上流貴族の恋愛譚であり、主人公の女君が后になることはない。これらの作品の後に成立し

た『とりかへばや物語』は、初めて女主人公の栄達を描いた作品であるといえよう。

そこで注目したいのが、女君をはじめとする左大臣家の繁栄の描き方である。平安時代の物語は、例えば『源氏物語』では、作品の時代設定を成立当時ではなく、少し遡って醍醐く村上朝に置く、ということがある。その時代を聖代とみなし、理想の時代として想定し、物語に取り込んでいる。こうした時代設定は、『とりかへばや物語』にも見られるのではないか。本稿では、『とりかへばや物語』の、女君を中心とした左大臣家の繁栄の描かれ方とその背景にあるものを論じていく。

一、『とりかへばや物語』と美福門院

『とりかへばや物語』の作者は未詳で、成立時期については、成立の下限は『無名草子』の成立(一二〇二年)以前であることはわかっている。成立の上限については、鈴木弘道氏の「一一〇五年頃～一一七〇年頃(約六五五年間)」「説①」や、森下純昭氏の「一一九二年頃～一二〇二年頃(約一〇年間)」「説②」がある。どちらの説も他作品の成立時期からの推定であるが、他作品の成立時期も明確ではないため決定打に欠ける。作品中の登場人物の人物設定から成立年代を推定されたのが、西本

寮子氏である。作品中に女春宮が登場することと、その女春宮が帝妃を経ることなく女院になったことに注目して、史実上帝妃を経ずに女院となり、さらには近衛天皇崩御の際、女帝に擁立する動きもあったとされる鳥羽院皇女暲子内親王(後の八条院)の存在が背景にあるのではないかとされている^③。さらに、作品の巻四で女君が国母の位を手に入れる場面と、男君の昇進と官位の二点に注目し、準拠となる史実を指摘して作品の成立年代を「一一六六年～一一七〇年」に推定されている^④。

さらに、女君が国母になる場面について、西本氏は「生後間もない親王の立坊」、「女院号の授与」、「女御の宣旨」などの、物語の記事と符合する美福門院得子の例を提示された。確かに、女君が女御として入内したわけではなく、尚侍として入内して帝の寵愛を受けたことと、美福門院得子が非公式に入内して鳥羽院の寵愛を受けたことは重なる。また、中宮と女御という違いはあるが、生まれた皇子が生後二か月程度で立坊し、それを受けて母である女君が立后するのも、美福門院得子所生の皇子が生後三か月程度で立坊し、それを受けて母の得子が女御となった例に似ている。また、『とりかへばや物語』の女春宮の背景にあるとされる暲子内親王は、美福門院得子所生の内親王である。美福門院とその子が『とりかへばや物語』の背景にあるとする説は興味深

い。このことを念頭に置いて、作品成立の周辺事情を別の角度から探ってみたい。

物語の成立年代や作者像を推定するのに、引歌表現が手がかかりになることがある。『とりかへばや物語』についても、成立年代の上限を知る手がかかりとなる引歌表現が指摘されている。その箇所を確認していく。

「げに、かかる御慰めはべらざらましかば、さのみながらふる命もありがたくやはべらまし」など聞こえたまふ。げに、これにては、なき古里につくづくと涙ばかりを友にて明かし暮らしたまひしよりもこよなく思し慰む心地す。

(巻第四・四九六～四九七頁)

宰相中将が吉野の中の君と結婚し、男君と対面した場面である。女君のいなくなつた宇治の邸でぼんやり涙だけを友として過ごすより、中の君と都で過ごす方がはるかに心が慰められる、という心中描写である。この部分の引歌とされるのが、二条院中納言典侍の歌である。

二条院かくれさせ給て彼院に中納言典侍御はて
までとて一人さぶらひけるにいひつかはしける
前左兵衛督惟方
かくれにし雲の月を思ひ出でてたれとむかしの秋
をこふらん

返し

二条院中納言典侍

かきくらす涙ばかりを友としてかくれし月をこひぬ
よぞなき

(玉葉集・雑四・二四〇三・二四〇四)

藤原惟方の歌への返歌であるこの歌は、二条院の死を悼んだ歌であり、二条院が崩御したのは永万元(一一六五)年七月二八日であるため、この歌を引歌とする物語の成立上限は一一六五年となり、西本氏の説ともほぼ重なる。『新日本古典文学大系』の解説^⑤ではこの「涙ばかりを友にて」が二条院中納言典侍の歌を踏まえたものか、と指摘され、その内容については、「中納言典侍の歌は、ひとり涙を友として亡き上皇を慕い続けている、との意であるが、『今とりかへばや』の方も、死別・生別の違いこそあれ、この歌を踏まえると思れば、引かれなかつた下の句を想起させることで、行方知れずの女大將を慕い続けていた、という内容が補完できるように思われる」とされている。また、『新編日本古典文学全集』の解説^⑥でもこの箇所について、「古本では、先述したように、女君は最終的に権中納言と結ばれる筋であったと推測されるので、この一文は今本独自の表現と考えてよい。この引歌を認めれば、今本の成立は、二条院崩御の永万元年(一一六五)以降であることが確かとなる」とされている。

本稿では、この歌の作者にも注目してみたい。二条院

中納言典侍は伝未詳で、勅撰集への入集もこの『玉葉和歌集』の一首のみで、人物についての詳細な情報は知る事ができないが、少なくとも二条院に仕えていたことは確かである。この『玉葉和歌集』の歌は贈答歌で、藤原惟方の歌への返歌であり、二人のこの贈答歌は惟方の家集『粟田口別当入道集』にも入集している。藤原惟方は二条院の乳母子で、鳥羽院腹心である藤原顕頼の子である。はじめ美福門院に仕え、二条天皇即位後は天皇親政派として後白河院と対立した。二条院は後白河天皇の第一皇子ではあるが、母を早くに亡くしてからは美福門院に養育されている。父後白河院よりも、鳥羽院や美福門院に近い存在であった。つまり、二条院中納言典侍が美福門院と直接関わりを持っていたかどうかはわからないが、歌のやりとりをした惟方は美福門院とも深いつながりがあった。

この二条院中納言典侍の歌は、『玉葉和歌集』と『粟田口別当入道集』の他に『万代和歌集』に入集している。『玉葉和歌集』の成立は正和二(一一三三)年、『万代和歌集』の成立は宝治二(一一四八)年で、『とりかへばや物語』の成立より後に成立しているので、物語の成立や流布よりも前に世間に広く流布したとは考えにくい。『とりかへばや物語』成立時点ではある一定の狭い範囲にしか流布していなかった可能性はある。美福

門院や二条院との関係を見ると、この引歌の「涙ばかりを友にて」という表現が、『とりかへばや物語』が美福門院と何らかの関わりがある場で生まれたことを推定する一つの手がかりといえよう。

歌の表現については、もう一つ美福門院とのつながりを示す手がかりになる資料がある。巻四の作中歌である。

主ゆゑ訪はるべしとは思はねど月にはなとかたづけぬ
来ざらん (巻第四・四八九頁)

男君が、吉野の中の君を宰相中将と結婚させようとして、宰相中将を遊宴に招いた際の歌である。この歌とよく似ているのが、『隆信集』にある次の歌である。

とし月すみなれにし女の、またこと人にももの申すよしをききて、たえはべりにしつぎのとしの春、女のもとより、花のちりたるを、ものものふたにいられてつかはして

ありしゆゑとはるべしとはおもはねどちりぬるはな
のゆくへたづねよ (隆信集〈寿永本〉・一九)

この二つの歌を見比べると、「あるじ」と「ありし」という一語の違いはあるが、『とりかへばや物語』の男君の歌と上句がよく似ている。歌の内容をみると、『とりかへばや物語』の男君の歌は「主人が私ではお招きしてもおいでいただけるとは思いませんが、こんなに美しい

月なのになぜおいでくださらないのでしょうか、ぜひお越しください」と、月を口実に招いている。『隆信集』の女の歌は、「あるじ」が「ありし」になるが、「ありし」を「以前の（私の振舞い）」と理解すると、「以前の私の振舞いのために訪ねて下さらないとしても、散ってしまった花の行方はおたずねください」となり、『とりかへばや物語』の歌と比べても主旨が変わることはない。月と花との違いはあるが、内容はよく似ている。

ところで、『隆信集』には二系統があり、先に示した歌は異本である寿永本のものである。もう一つの系統の、流布本である元久本にも同じ歌と思われるものがある。下句は全く同じで、上句は「あるじゆゑとふことのははかれぬとも」と、少し違う形となっている。注目したいのはこの元久本では初句が「あるじゆゑ」となっていることである。寿永本とは別の系統で『とりかへばや物語』の歌と同じ「あるじ」の本文が確認できたことは興味深い。寿永本の「ありしゆゑ」の一句は他に例がなく、歌としてなじまない。『とりかへばや物語』の成立当時には、物語の上句と同じ「あるじゆゑ」があったのかも知れない。そう推測すると、『とりかへばや物語』の男君の歌の上句とこの『隆信集』の歌は同じであった、つまり、物語の男君の歌は『隆信集』に拠ったと考

えられないであろうか。

寿永本の成立は寿永元（一一八二）年頃の成立とされているため、『とりかへばや物語』の成立最下限よりも前である。この歌の作者は隆信本人ではなく、名前もわからないある「女」である。名前が知られていない人物であるから、この女の方から歌が流布したとは思われない。さらに、『隆信集』の他には採られていないので、世間に広く流布していたとは考えにくい。ある一定の狭い範囲で共有され、手に取られていたと考えられよう。『とりかへばや物語』の作者はそれに触れることができる立場にあったと思われる。

『隆信集』のこの歌が限られた範囲で共有されていたことを確認した上で、歌を贈られた隆信について考えてみると、隆信の母は美福門院加賀で、美福門院や八条院に仕えた人物である。隆信自身も久安五（一一四九）年に八歳で美福門院蔵人となっており、美福門院や八条院とも関わりのある人物である。この歌も、『とりかへばや物語』と美福門院周辺を関係づける資料として扱うことができるであろう。

このように、『とりかへばや物語』と美福門院との関係を見てきた。西本氏が言われるように、「左大臣家の姫君―女主人公―の栄達は、鳥羽院政期に最高に時めいていた得子とその背景に意識されている」と見てよいと

思われる。

ただし、美福門院は、鳥羽院の寵愛を受け最高に時めいてはいたが、『とりかへばや物語』の女君とは異なり、摂関家の生まれではない。『尊卑分脈』を見ると、美福門院の父・藤原長実が藤原北家傍流の末茂流の生まれである。長実は白河院の近臣であったが、鳥羽院政の頃は白河院の側近の排除により、不遇であった。最終的な官位は権中納言正三位である（死後左大臣に追贈）。

『今鏡』の記事によると、

いとやむ事なき際にはあらねど、中納言にて御親はおはしけるに、母北の方は源氏の堀河の大殿の御娘におはしける上に、類ひなくかしづき聞えて、ただ人にはえ許さじと持て扱ひてなむ。中納言隠れられ侍りける後、院に元より思し召しつつかや過しけむ、かの父の御忌など過ぎけるままに、忍びて御消息ありて、隠れつつ参り給ひける程に、日に添えて類ひなき御志にて、時めき給ふ程に……（後略）

（すべらぎの下・男山・一五六頁）

得子が鳥羽院に入内したのは父・長実の死後であったことがわかる。その他の一族については、美福門院の長兄の子・俊盛は叔母である美福門院の庇護を受けていたように、分国の受領にもなっている^⑧。唯一美福門院の側近として重用され、最終的な位は正三位であった。美

福門院が鳥羽院の寵愛を得始めてからも、長実一族の不遇はほとんど変わることはなく、近親者で美福門院に重用されたのは甥の俊盛一人のようで、美福門院の兄弟はほとんどが受領階級で終わっている^⑨。

これは『とりかへばや物語』の結末で、女君が中宮・国母となつて男君も関白左大臣となり、左大臣家が栄華を極めるといふあり方とは少し違う。美福門院が鳥羽院に寵愛され時めいた后として、経済的にも力を持った女院として、ある一面では女君造型の背景にあつたとしても、別の時代・人物に理想とするものがあつたのではないであろうか。『とりかへばや物語』の結末、左大臣家の栄華には、鳥羽院政期の美福門院の他にも意識された時代や人物があつたのではないか。

二、摂関政治最盛期への志向

『とりかへばや物語』が美福門院の他に意識していた時代・人物について考察していく。まず、物語の時代設定について少し考えてみたい。物語が成立したのは院政期であるとしても、ほとんどの作り物語が「今は昔……」、「昔……」と語りはじめるように、物語の舞台を少し前の時代に設定するのは必然的といえる。『とりかへばや物語』も、「いつの頃にか……」と始まるので、昔の

こととして語っている。では、具体的にどのあたりの時代を想定しているのだろうか。これは、作中で男君・女君が尚侍になっていることから、少なくとも院政期以前であることが推定できる。尚侍は、天皇のそば近くで取次ぎなどを行う者であるが、主に摂関家の娘のような有力な家の女性が務めることから、後に天皇の后となることが多かった。そのため、実質職務は典侍以下が務めるようになり、尚侍自体が平安後期には次第に少なくなっていくた。平安後期、尚侍に任命された最後の例は長久三（一〇四二）年一〇月、後朱雀朝の藤原真子である。三条朝、後一条朝、それから同じ後朱雀朝の藤原嬉子と、近い時期の尚侍が後に帝の后妃（嬉子は東宮妃）になっているのに対して、真子は尚侍のまま終わっているが、それは病身のためにほとんど出仕できなかったことも関わっている。基本的にこの時代の尚侍は後の后妃となる人物が任ぜられるものであった。後朱雀帝は、彰子所生の子で、真子は関白教通の第二女である。彰子姉弟の子の世代を最後に尚侍の任命はしばらくなくなる。『とりかへばや物語』は、院政期にさしかかる前、このように尚侍が置かれていた摂関政治の最盛期を舞台として想定していたのではないだろうか。

摂関政治の最盛期といえは、道長と上東門院彰子・頼通親子の時代である。この時代の摂関家と『とりかへば

や物語』の左大臣家のきょうだいは、類似点がある。物語の、男女きょうだいが摂関家の生まれであること、一人は立后して国母になり、一人は関白になる設定などは、道長と東三条院詮子、頼通と上東門院彰子らの摂関家のきょうだいが意識されていると思われる。

両者の共通点・類似点は他にもある。まず、一条朝と『とりかへばや物語』作中での皇位継承者不在の問題である。作中で、女君が懐妊した際、次のように期待が寄せられる。

内侍の督の君もこの春ごろよりただならずなりたまへるを、上は、限りなき御心ざしに添へて、あまたの御方々にいまださることものしたまはず、儲けの君おはしまさぬころにて、山々寺御祈りあるころかくものしたまへば、限りなく思しよろこびたり。

（巻第四・四六六頁）

帝の後宮には、女君の他に梅壺女御をはじめとする「あまたの御方々」がありながらも、いまだ次期東宮となるべき皇子が不在であった。そのため先帝の唯一の娘である女一宮が春宮に立てられたのであるが、それは中継ぎ的な存在に過ぎない。よって男皇子誕生が切望され、「山々寺御祈り」が行われている。女君はその後、無事男皇子を出産し、国母となる。

この世継ぎ誕生を切望する様子と似ていると思われる

記事が『栄花物語』に見られる。

ただ、「女御のおぼえぞ、のどやかに見えたまへる。承香殿ぞ思はずにおはすめる」と、世人申したる。内裏わたり今めかしうなりぬ。女院、「誰なりともただ御子の出でたまはん方をこそは思ひきこえぬ」とのたまはず。

(巻第四・みはてぬゆめ・二二七〜二二八頁)

円融帝の後即位した花山帝の在位は二年未滿である。花山帝から一条帝への交代が最も短い、特に冷泉帝以降一条帝即位までの間、たった一九年の間に四人の帝が交代している。一条帝の次には、冷泉帝の第二皇子である居貞親王(後の三条帝)が東宮としてひかえており、円融―一条系を強化するためにも世継の誕生が切望されたのである。一条朝はこのような状況にあった。そのため、東三条院は「誰なりともただ御子の出でたまはん方をこそは思ひきこえぬ」と、誰であつても御子を出産した女性を大事に扱うと言つたのである。『栄花物語』には、他にも同じような記述がある。定子の懐妊の際には、

かう女御たち参りたまへれど、今まで宮出でおはしまさぬことを、女院はいみじう思しめし嘆かせたまへり。中宮のただにもおはしまさぬを、さりととも頼もしう思しめすを、「何にかはおはしまさん」

と、世の人おぼつかなげにぞ申し思ふべかめる。

(巻第四・みはてぬゆめ・二三三頁)

と、待ちに待った皇子が誕生するかと、定子に期待をよせている。続いて元子の懐妊の際にも、

院も、いづれの御方にも、ただ男御子をだに生みたてまつりたまはばと思しめすほどに、三月ばかりにて奏して出でさせたまふ。

(巻第五・浦々の別・二八一頁)

と、どの方であつてもただ男皇子を産んでくれるのだから、と期待している。

一条帝の後妃たちは男皇子を出産すべく寵愛を得ようと競い合い、その結果男皇子を出産し、国母として後宮の頂点に立つたのは彰子であつた。定子が先んじて敦康親王を出産しているが、中関白家の零落と定子の死によつて立坊は叶わなかつた。彰子所生の敦成親王が立坊・即位してからの道長・彰子と頼通親子の栄華は言うまでもない。『とりかへばや物語』で、女君の皇子出産をきつかけとする左大臣家の栄華は、この彰子の例と合致するように思われるのである。

それに関連して、類似している事柄がある。『とりかへばや物語』は男女の性愛について、登場人物の心情も事細かく丁寧に描いているが、同じくらいに親子やきょうだいの関係性にも重きを置いているように思われる

⑨。女君が「世づかぬ身（世間の人とは違う身）」であることを嘆き、出家願望を抱きながらもその思いを押しとどめているのは、

さまざま背き捨てたてまつりてもいとど罪浅からずこそならめと、さすがにすがすがしくも思ひ立たずありふれば
（巻第一・二二〇～二二二頁）

と、ひとえに両親の愛情を裏切るまいと思う心からであった。女君の親を思う心、そして父左大臣の子を思う心は、度々語られている。父大臣について一例を挙げる

日ごろはものもをさをさまゐらざりけるを、今ぞ御前にもまゐらせたまふついでに、もろともనికిしめす。世づかぬ御有様を、今はさるべきなりけりと、かかるさまにつけてもめでたくすぐれて世に交じらひつきたまへば思し慰みはてつるに、うれしくいみじと思したる御気色、いとあはれなり。

（巻第一・二五二頁）

と、女君がしばらく吉野の宮の元に滞在していた間、食事も満足に摂らず、ただ心配していた。女君が無事帰ったことを嬉しく思っている様子が描かれている。

親子の結びつき以上に注目したいのが男君とのきょうだいとしての結びつきである。内向的であった男君が女春宮のそばから離れる決意をしたのも、行方知れずとな

った女君を探し出すためであった。男君の奮起で女君を見つけ出した後、二人は入れ替わることを決意する。今まで男として生きて来た女君が女として、今まで女として生きて来た男君が男として今後自然に暮らしていくためには、並大抵の努力では足りないであろう。その様子が書かれている。

容貌様はいといたく違ひたまふこともよにあらじ、大方の世のことぞ違ひてあやしからんと思せば、さかしきやうにはあれど、うけたまはり行なひし公事ども、その人かの人の言ひ告げしこと、答へたまふべきさまなど、さかしげなくいとよく聞こえ知らせたまふ。琴笛の音、書きたまふも、手など、さばかりの人のものぐるほしく現し心なきやうにて籠り居たまへるなれば、たどたどしからず、ただ同じ声に吹き鳴らし弾き鳴らしたまへるさま、異人とあへて分くべくもあらず、手などは、まして書き似せんとまねびたまふにつゆ違ふところもなし。

（巻第三・三八八～三八九頁）

お互いの公務のことから、音楽や筆跡まで、自然に立場を入れ替えるために、我を忘れて吉野に籠り、互いの知識や技術を教え、そして習っている。こうした努力と協力によって自然に入れ替わることができ、やがて左大臣家が栄華を極めるに至ったのである。こうしたお互いの

協力なくしては、その後自然に入れ替わることもできなかつたはずであり、それぞれのその後の出世はお互いの協力の賜物であろう。物語の中で政治について詳しく語ることはないし、女君と男君が家の繁栄のために直接何をしたという記述もないが、二人は自然に入れ替わったことで結果的に家を繁栄させている。摂関政治の最盛期に、東三条院詮子と道長や、上東門院彰子と頼通らのように相談し政治を執り行い、家を盛り立てている様子⁽⁹⁾に近いのではないかと思われる。東三条院詮子と道長の例を挙げると、『大鏡』に次のような記事がある。

女院は、入道殿を取り分きたてまつらせたまひて
(中略) 入道殿の世をしらせたまはむことを、帝い
みじうしぶらせたまひけり。(中略) されば、上の
御局にのぼらせたまひて、「こなたへ」とは申させ
たまはで、我、夜の御殿に入らせたまひて、泣く泣
く申させたまふ。その日は、入道殿は上の御局にさ
ぶらはせたまふ。いとひさしく出でさせたまはね
ば、御胸つぶれさせたまひけるほどに、とばかりあ
りて、戸を押し開けて出でさせたまひける。御顔は
赤み濡れつやめかせたまひながら、御口はこころよ
く笑ませたまひて、「あはや、宣旨下りぬ」とこそ
申させたまひけれ。(人・三二八〜三三〇頁)

道長の摂政就任をしぶっていた一条帝を、詮子が説き伏せ、ついに宣旨が下されたのである。道長の榮華も姉・詮子の支えあってこそといえよう。次に、上東門院彰子と頼通・教通の例を挙げる。『春記』の長曆三(一〇三九)年十二月十七日の記事には、

仰云、藏人頭以信長可仰下敷由、可仰關白者、早且參彼殿申此由、被申云、承畢、但令聞女院給、可有定者、予歸參奏此旨畢、未時許仰云、頭事申女院畢、早有補任之御返事

(仰せて云はく、「藏人頭、信長を以て仰せ下すベきかの由、關白に仰すべし」てへり。早且、彼殿に參り、此の由を申す。申されて云はく、「承り畢りぬ。但し女院に聞せしめ給ひ、一定有るべし」てへり。予、歸り參り、此の旨を奏し畢りぬ。未時ばかり、仰せて云はく、「頭の事、女院に申し畢りぬ。『早く補任せよ』の御返事有り。)

と、藏人頭補任の事で、頼通が彰子の意見も聞いて協議していることがわかる。また、『榮花物語』には次のような記事がある。

關白殿、「いとあはれに、ことわりの御年のほどなれど、また誰にもをも申しあはせて過ぐさんずらん。何ごとも院に參りて申さんとこそ思ひしか。老の末にさまざまかくうち捨てられたてまつりぬるこ

と」と、泣かせたまふ。二条院、皇后宮など、心細くあはれに思し嘆かせたまふ。

(巻第三十九・布引の滝・四七三〜四七四頁)

上東門院の葬送の場面で、教通が女院の死を嘆いている。「何事も院に参りて申さんとこそ思ひしか」から、関白教通が政治の場で何事も彰子に相談していたことがここからうかがえる。

物語作品の中で政治に関わる事柄に触れることは少なく、『とりかへばや物語』に右のような政治の記述は見られないが、入れ替わりに際して協力し合ったきょうだいの描写を見ると、物語が大団円を迎えた、その後の様子はきつと詮子と道長や、彰子と頼通・教通のように、左大臣家を盛り立てるために協力して政治を執り行っているであろうと想像できる。

『とりかへばや物語』が成立した院政期は、上皇の専制的な統治の時代であり、摂関家をはじめとする貴族層は徐々に権力を失っていき、保元の乱以降は特に武士が力を増し、貴族勢力は衰退して武士の世に代わろうとする時代であった。この頃の摂関家でも娘を入内させているが、実子がない場合は養女を入内させる例⁽¹⁾も多くなり、摂関政治の最盛期ほど親子関係を重視しなくなっているようである。養女を迎えてまで入内させても、上皇の権力は強大であり、摂関政治の最盛期のように帝を

も動かすような力関係では決してなかった。

このような成立当時の貴族社会の諸相は、『とりかへばや物語』には見られない。女君の背景に美福門院を意識しているとはいえ、理想的な時代としては摂関政治の最盛期を志向していたと考えてよいのではないであろうか。鳥羽院政期、院の寵愛を一身に受け、女院となつて力を持った美福門院は確かに当時最高に時めいていた存在であったかもしれないが、その一方で、そのような美福門院をしても、不遇であった兄弟たちを重用して一族に栄華をもたらすことは叶わなかったのである。そういった背景を鑑みると、『とりかへばや物語』がある一面では美福門院を意識しながらも、時代としては摂関最盛期の東三条院詮子・道長や上東門院彰子・頼通らの時代を理想の時代として志向しているといえよう。

おわりに

『とりかへばや物語』は、男女のきょうだいの入れ替えを描くという特異さから、珍しさや同性愛的描写などに目がいきがちであるが、男女のきょうだいがお互いに協力し合い、最終的には女君の入内・皇子出産・立后によって左大臣家に繁栄をもたらし、大団円を迎える物語である。その結末部分に注目して、作品が成立した周辺

から、『とりかへばや物語』の背景に意識された人物・時代を推定した。

作品成立に近い時代、女君造型の背景にあったとされる美福門院について、先行研究の指摘に加え、新たに引歌表現を確認することで作品との関わりを見出すことができた。鳥羽院政期、院の寵愛を一身に受けていた美福門院がある面で女君の背景に意識された一方で、美福門院のような后にとって理想とされたのは摂関政治最盛期の時代であった。道長や上東門院彰子の時代を理想とする見方は『栄花物語』にあり、また『源氏物語』以降の物語作品にも見られる。『とりかへばや物語』の女君の栄華の描き方に、『栄花物語』や『源氏物語』などから影響はあるであろう。しかし、ある面では『とりかへばや物語』はそれ以前の作品にはない描き方をしていると思われる。『源氏物語』や、また『源氏物語』の影響を色濃く受けた『夜の寢覚』や『狭衣物語』にも少なからず摂関政治の最盛期を理想としているであろうが、これらの作品が成立したのは院政期前である。作品成立時には上東門院彰子や頼通がまだ存命であったかもしれない。作品に描かれた理想の人物は、成立当時実際に存在していたのである。だが、『とりかへばや物語』が成立した時代にはその理想は過去のものとなっていた。上東門院彰子以後、摂関家の娘で彰子ほどの栄華を極めた后

はいない。摂関家の娘であってもままならないことを、まして摂関家の娘ではない、傍流の出である美福門院が彰子ほどの栄華を手に行けるはずもない。摂関政治の最盛期は、院政期という、貴族社会の転換期、その時代が理想として仰ぐ時代でもあった。そうした貴族社会の受難の時代に『とりかへばや物語』は作られ、現実世界では叶わない理想を物語世界に描いたのである。

※本文の引用は、『とりかへばや物語』、『大鏡』、『栄花物語』は『新編日本古典文学全集』に、『今鏡』は河北騰『今鏡全注釈』（笠間書院・二〇一三年）に、『春記』は増補史料大成刊行会編『春記 春記脱漏及補遺』（臨川書店・一九六五年）に拠った。なお、『春記』の訓読文は、読解の便のため、句読点や「」を付した。『とりかへばや物語』以外の和歌の引用・歌番号は『新編国歌大観』（角川書店）に拠った。

【注】

(1) 鈴木弘道「とりかへばや物語成立年代考―無名草子の「今の世」の具体的意味を論じて―」（『平安文学研究』四八巻・一九七二年六月）において、『無名草子』で「今の世」「この頃」「古きもの」を指す作品の成立時代を手掛かりに、「今の世」の物語である『今とりかへばや』の

成立年代を推定されている。

年)の「第四部・院政期の諸階層」に詳しい。

(2) 森下純昭「『今とりかへばや』の成立臆説」(王朝物語研究会編『源氏物語とその前後』三巻・一九九二年五月)において、引歌や『物語二百番歌合』などから推定された。なお、『物語二百番歌合』の成立は、久曾神昇氏による一〇〇六年成立論が通説であったが、樋口芳麻呂氏が成立を一〇〇六年引き上げる成立論を提示されたため、森下氏の論はこの樋口説に拠る。その上で、『物語二百番歌合』には「今とりかへばや」の作中歌が一首も採られていないことから、成立の上限を『物語二百番歌合』成立後とされた。

(8) 『尊卑分脈』によると、顕盛(左兵衛藏・従五位下)、顕盛(修理大夫・正四位下)、長輔(右京大夫・従三位)、時通(備後守・従五位下)、長盛(従五位下)、長親(加賀守)。

(3) 西本寮子「『今とりかへばや』成立試論—女春宮設定の史的背景と女二宮の役割り—」(『国語と国文学』六二巻八号・一九八五年八月)

(9) 『とりかへばや物語』に描かれる親子・兄弟間の関係性(愛情)についての論は、鈴木弘道『平安末期物語についての研究』(赤尾照文堂・一九七一年)の「第二章 とりかへばや物語に現れた愛情」などがある。

(4) 西本寮子「『今とりかへばや』成立試論—女春宮設定の史的背景と女二宮の役割り—」(『国語と国文学』六二巻八号・一九八五年八月)

(10) 他に、東三条院が国政に関わっていたことは『御堂関白記』、『小右記』、『権記』などに記事が見える。政治において頼通や教通が姉・上東門院を尊重していた例は他にも、『御堂関白記』、『小右記』、『春記』などの記事に見える。

(5) 大槻修・今井源衛・森下純昭・辛島正雄『新日本古典文学大系26 堤中納言物語 とりかへばや物語』(岩波書店・一九九二年)

(11) 近衛帝の皇后・藤原多子(左大臣・藤原頼長の養女)、同中宮・藤原皇子(皇后・得子の猶子でのちに摂政・忠通の養女)、後白河帝皇子時代の妃・藤原懿子(左大臣・源有仁の猶子)など。

(6) 三角洋一・石壁敬子『新編日本古典文学全集』住吉物語 とりかへばや物語(小学館・二〇〇二年)。他多数の注釈書においても同様の指摘がある。

— ひがし・あさみ 日本文学研究科 修士課程二年 —

(7) 五味文彦『院政期社会の研究』(山川出版社・一九八四